



寂談陸集

五

文学部
913.52
H48y
5



107

少のつて人なるがうりあうさうさやまらあうびたう壯
報のげう大開秀吉公東大仏殿建云くふふ
うご人丈小なうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさう
軒ホウくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくく
あり軒にせうくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくく
かろくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくく
京中の敷居せんんんんんんんんんんんんんんんんんんんんん
こせりくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくく
源心少海増田長徳村石田治平の相長村大庄大相
この立奉行の直人付くくくくくくくくくくくくくくくくくく
仏若うの作く定ぬる海右よりこの定成さきとて

第の三十二丈仏像の三十二丈とて又増減ありき
この像とまうらた教説法お座仏の神相ありこの
ゆへはまが引をぬ座寺といふゆへ大徳寺古徳寺
を信おとせんうと信く建之成教せうさうさうさう
遷化くくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくく
所帯職こりくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくく
勝之んをせべ大造めく運川おせくくくくくくくくくく
せん大開とぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬ
震殿の仏工居くくくくくくくくくくくくくくくくくくくく
同くくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくく
その外を漆膠めて塗之わとくくくくくくくくくくくくくく



うーやせればその体もあつていふ所家欠見本に
何付しと本像あつて下地は漆膠あつてその
上を粉を施してにきまりする。いふ人として
おのゝ成なる子川に流る所は河内郡の相
加次屋内流る所を命を付する。震旦も佛工
指留して仏像出来たりものに漆膠の形に
蝦蟇を百俵よりよそへて置く。いふ人河内郡の
河内郡肥後郡上田郡水正郡のとそ宗久是ホ
の人くその指留お徳とて伊勢産法を御く
つとりに下しする。されども蝦蟇のあつては
像もそののいひのさるるなり。老翁といふ像も

出来くく漆膠をわたり粉をそのに造はまらぬの
ほくりに造るのゆへあり。寺塔造りの功徳大
なかりし故に。寺塔造り入ると大伽藍とあつて
建てる。きりあつて善像の形も軀体せるあり。
大周よりよそへて像あつて是はた像えんころの
徳とあつていふゆへに。像とてはた像えんころの
よりいふとあつて大伽藍の境内に小堂ありて平
坐の像もいふとあつていふゆへに。寺塔造り
しはた像も速成の功ありぬ。像も寺塔造り
はた像もいふとあつていふゆへに。大伽藍の造り
はた像の像よりしきりあつていふゆへに。

新ひくく大の海をいづつせ株をたうしき
大木ごとく根を斬りてついでに川をあげぬ
子人半ちとよみん。虹梁をとり百人をりてあ
川あを渡りけりしとよき造作の由にいふ
うきうき大の海をいづつせ株をたうしき
作らざるにけりしとよき造作の由にいふ
成程しきりしやけりしとよき造作の由にいふ
智恵をたうしきとよき造作の由にいふ
又そのえいけりしとよき造作の由にいふ
ゆくまゝ。與まのりしとよき造作の由にいふ
るしきり。若しとよき造作の由にいふ

まの祭良の大仏師宗良は。同村宗良は。同
その外無治者。通おはよびのやせ。と速換益かんけ
をて中あしきとよき造作の由にいふ
のあしきとよき造作の由にいふ
うきうきとよき造作の由にいふ
各あしきとよき造作の由にいふ
さしきとよき造作の由にいふ
大園の御前。よき造作の由にいふ
さしきとよき造作の由にいふ
作らざるにけりしとよき造作の由にいふ
裁事の事。先あしき造作の由にいふ

まうしにひびきしきこぼしかりしは洛中ををる男
女は希代の名物なりとてわまはしきし類ひまじ
群集をたねふゆふたけけりきあたる石の原乃
興り大佛のいさ事七日たると。新野興上人每
日百人お千人を御河津事多ふはくいかに御
二子にも及びけりされば遠近如能く徳と徳信を
御ふまその金銀の費と考ふに中へ流の御
不ふわら流の志うたがく佛は眞隆の功徳莫たが
つしついなが。まゝに國家の難人民の愛たるにわ
もわらぬと扇としそしり難とわりをるし也たし
との後慶長元年閏七月大比呂あつて佛像破

大國大佛の御河津事多ふはくいかに御
二子にも及びけりされば遠近如能く徳と徳信を
御ふまその金銀の費と考ふに中へ流の御
不ふわら流の志うたがく佛は眞隆の功徳莫たが
つしついなが。まゝに國家の難人民の愛たるにわ
もわらぬと扇としそしり難とわりをるし也たし
との後慶長元年閏七月大比呂あつて佛像破
大國大佛の御河津事多ふはくいかに御
二子にも及びけりされば遠近如能く徳と徳信を
御ふまその金銀の費と考ふに中へ流の御
不ふわら流の志うたがく佛は眞隆の功徳莫たが
つしついなが。まゝに國家の難人民の愛たるにわ
もわらぬと扇としそしり難とわりをるし也たし
との後慶長元年閏七月大比呂あつて佛像破

頃まていされ人の流流くづらひりびりさうら
りてきたる宮にた中して約もすまふりなれぬの報
文の動方湖外に流さるる山平をて寄ふわい休吃
中侍とさひいふてを換秦履家何立しと行か
まバ休といふは海の方より香擁藍國馬不ぞわし
次の句とたさとしきたる人わら。ほねらあにらり
うらうらとよみぬ教の極端。みしてわがた
之衣と肩ふましく平包と頸よけたなびり杖よ
すたりて来らふぞわりきゆる。凡そげく君れわ
まのむら野より海にたふとさうさおたなるにけ
信まのこり中あらけしよりく怒くぞとておまふ

その風儀堂然としてほねらうにほねら馬もよめ
る似儼ふわいふとく信儀にたすしと信ひらうん
んしふけ信らめいもわいも都へのわたりこく
是らうと道ほりたなりたひいよまはとさうふりた
國風もや及らうとけ信も信アなまづ名あつたまを
之はもたむらうらふいぬすしと信は信儀の
寄るよとゆほりるにほねらまの風儀よたんとすから
同くいつちやうりさうらとさまを力信は信儀
初つていされ。まは信あらんやし信あらんや
不意とさうらとまは信あらんやし信あらんや
紙と信あらんやと信あらんやと信あらんや



なるお白いつちやうをまがけしゝ糸のふかしの
 事小わしは年おれれ分りて現世の縁と造りお
 りおまじ世具よりにおゆるいのごとくかくて遠く
 たりしつゝこの命をや入世さすづきの月えれあ
 よりづふ式百ありにわたりて年終とらさしうけ
 聖徳太子の御記にありしをまきしに世智に
 縁を被りて他の種はわくとかくはりのまは
 なるもとりたるならう被んおらうたのち
 へ先付信の念かりておの世にきて前金と
 ひて御記がづさうふはたはた金よとわ
 りとまてかりまらとやとておまの鳥山の記



